

広報

やまと

3月号
2012 No. 220

特集

今里集落オムケ・オホーリ

「ネリヤから
幸をもたらす
神を迎える」

今里立神

特集

今里集落オムケ・オホーリ

私たちの住む大和村は東シナ海に面し、人々は急峻な山々と海に挟まれたわずかな平地に農地を求め、肩を寄せ合うようにシマ（集落）を形作ってきました。常襲する台風や冬の季節風など厳しい自然に耐えるため、村人はおのずと助け合って暮らして来たことでしょう。

このような過酷な自然条件の中で集落民が秩序を維持し、相互扶助をなし得た陰にはノ口とよばれる女性達の存在がありました。

ノ口は琉球神道の影響を強く受けた女性祭祀集団で、年間を通じて行われる集落の祭りや農耕儀礼の中心的役割を果たしてきました。

ナハンユ（琉球王府支配）からヤマトンユ（薩摩藩支配）と移り変わる中で、集落の安全と豊穣を祈ることにより人々の精神的支柱となったノ口。

今里集落に伝わる「オムケ・オホーリ」を中心に現代に生きる彼女らの「祈り」を追いました。

オナリ神信仰と女人政治

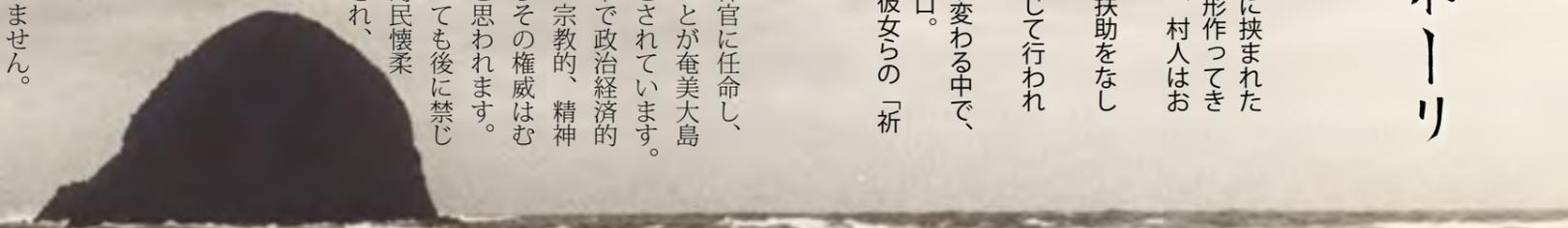
奄美群島や琉球諸島には、オナリ（女姉妹）がエヘリ（男兄弟）を霊的に守ると信じる「オナリ神信仰」が根強くあります。琉球王府は代々君主の姉妹を女神官「聞得大君（きこえおおぎみ）」に任命することにより、オナリ神信仰に基づく女人政治を確立。祭政一致体制により琉球諸島を精神的、政治的に統治しました。

聞得大君を頂点とする女人政治組織の中で、琉球王府が各間切（地方）の

按司（豪族）の女子を神官に任命し、

公儀の祭祀を司らせたことが奄美大島におけるノ口の始まりとされています。

ノ口は為政者の支配下で政治経済的な勢力を保ちましたが、宗教的、精神的な象徴であることからその権威はむしろ役人以上であったと思われる。薩摩藩の支配下においても後に禁じられるまでノ口祭祀は島民懐柔の政策から長い間黙認され、人々の暮らしと深く関わり続けました。



流人として幕末の奄美大島に滞在した名越左源太が島の様子を詳細に記した「南島雑話」には、薩摩藩がノ口（「能呂久米」と記述）に対し琉球から位階を受けるのを禁じたことや、その後もノ口が琉球に赴き王からインバン（首里之印が押された辞令書）を頂戴していたこと、さらには大熊村（現奄美市名瀬大熊）にインバンが保管されていた事、などが記されています。

公儀ノ口の証明でもあるインバンは大熊村のほか喜界町阿伝や宇検村名柄、宇検村屋鈍、瀬戸内町古志、徳之島町手々などで確認されています。

今里におけるノ口組織

今里集落は奄美大島中南部、本村の西端に位置する半農半漁の村で、カツオ漁が栄え活気を呈した大正期には人口千五百人を越す大集落でしたが、現在は人口129人（平成24年2月末）と急激な過疎・高齢化に悩む村です。

今里におけるノ口組織はオヤノ口（親ノ口）とよばれる最上位の神役を中心に、オヤノ口を補佐するウワーワキ（上脇）とシャーワキ（下脇）、各ヒキ（血縁）から出るイガミ、トネヤを守るグジヌシから成っています。

オヤノ口は元来中里ビキで受け継いでいましたが、前オヤノ口の坂本カズエ氏はユタ（易神）の占いを参考にヒキ以外から継承したと聞きます。なお、平成11年に坂本氏がお亡くなりになら

れた後の後継者は出ていません。

ウワーワキ・シャーワキは神事の際にオヤノロノの両脇に座る神役でワキノ口とも呼ばれます。ウワーワキは中元ビキから、シャーワキは今田ビキから選ばれるしきたりですが現在はオヤノ口同様に空位のままとなっています。

イガミはオヤノ口以外の神役の総称で、ミキガミ（神酒神）やクワーノ口（子ノ口）とも呼ばれます。各ヒキから選ばれ、現在は福永イクエさん（83歳）、安原フミさん（82歳）、中元シズ子さん（79歳）、川畑マズ子さん（78歳）、久永ミカエさん（77歳）の5名のイガミが神事を行っています。

グジヌシ（宮司主）はトネヤ（祭祀場の管理や神事の準備を司る男性の神役ですが現在は継承されておらず、実質的な役割は集落の区長が代行しています。

トネヤまたはカミヤと呼ばれる祭場は元来グジヌシの住家でしたが現在は消滅し、集落が建てた2、3坪ほどの簡易な建物を使用しています。

今里には、ナハドネ（中元ドネ）、ウンニヤドネ（森山ドネ）、イーマドネ（今田ドネ）、トラドネ（武田ドネ）、の4つのトネヤがあり、集落のヒキ（27系）全てがいずれかのトネヤのグループに属していました。なお、現在はイーマドネとトラドネはなくなり、それぞれナハドネとウンニヤドネに継承されています。

木リヤから幸をもたらす神を迎える



ウンニヤドネでの神事



ナハドネでの神事



一人ずつ六調を踊る

とうとうかなし

カミグチを唱え 鼓を打ち ネリヤの神に祈る

特集 今里集落オムケ・オホーリ

今里のノ口祭祀における最も重要な神事といえるのがオムケ（御迎祭）とオホーリ（御送祭）でしょう。

オムケ・オホーリは、旧暦二月最初の癸の日に、海の彼方にあるとされる理想郷「ネリヤ」から神様をお迎えし、旧暦四月最初の壬にお送りする祭りです。神様を集落に招き入れることにより、人々の健康と集落の平和を祈願します。神々はオムケ風と呼ばれるニシ（北西風）に乗って島を訪れ、オホーリ風と呼ばれるハエ（南風）に乗って帰って行くと言われています。

平成24年2月22日に行われた祭事を中心に文献等も参考にしておムケの概要をまとめました。



ウンニヤドネでの神事

オムケはホンマツリ（初葵）前日のミキ作りから始まります。ミキは米粉を原料とする発酵飲料で、南西諸島で広く神事に用いられます。以前は各戸から米1合を集めてミキを造り、神事の後には各戸へ再配分したと聞きますが、現在はパック詰めされた市販のミキを購入し、配分も行っていません。また、一晩寝かせたミキの容器を開封することを「ミキのクチャケ（口開け）」と呼び重要な神事の一つでした。

また、以前はオムケの到来を集落民に知らせるため、ユバンと呼ばれる周知役が「アチャヤオムケアンソビドー（明日はオムケですよ）」と辻々でふれ廻ったといえます。放送施設がない頃の懐かしい慣習です。

オムケ当日、ウンニヤドネを訪ねると正面の神棚に積まれたいくつもの木箱が目につきました。後に伺った話によると、それはイガミが途絶えてしまい、遺族によってトネヤに返された数々の神具だとのことでした。ウンニヤドネは森山ビキを始め山田、福永、福田、中里などのヒキが属していますが、この様な状況から現在では福永イクエさんが一人で神事を行っていました。

午前10時、カミギン（白衣装）を羽織り、白ハチマキを締めた福永さんが神棚に向かい神事が始まりました。この時奥の引き戸をほんの少し開けておくのは神様がお入りになるからだとのこと。

玉ハベエラ (大金久・徳家所有)

線香を三本立て、柏を打ち、「今日や二月又オムケ又日ダリヨシカナン集落バ守テイタボレ（今日は二月のオムケですから集落の人々をお守り下さい）。トートガナシ。トートガナシ。トートガナシ・・・」と、かすかに聞こえる声でカミグチ（神口）を唱えられました。以前はナリガネ（鉦）を打ち鳴らしたと聞きますが、この日は静かにクチを唱えお酒とミキの盃を取りウンニヤドネでの神事を終えました。

ナハドネでの神事

ナハドネはホントネ（本トネ）とも呼ばれる4つあるトネヤの中心で、各トネヤで神事をした後にはノ口全員が集まり神事を行います。福永さんはウンニヤドネでの神事を済ませるとナハドネへ移動。ナハドネでは安原フミさん、中元シズ子さん、川畑マス子さんの3名のイガミが待機しており、福永さんが到着するとまもなく神事が始まりました。

ナハドネにある神棚の最上段はオヤノ口の神具が箱のまま祀られ、その下に三台の香炉とシユウケ（供え物）、お酒、ミキが供えられていました。カミグチや所作は福永さんがウンニヤドネで行った方法と同じように見えました。



神扇 (安原フミ氏所有)

お酒とミキのトリカワシは神棚に向かって右から、安原さん↓福永さん↓川畑さん↓中元さん、の順番で行っていました。最後に「本当ヤイヤード先アタンバウンママモウシカニンド（本当は貴方の順番が先でしたが盃を廻しました。すみません）」という言葉が漏れてきました。恐らく年齢でなくノ口に「入信」した時期による上下関係を指したのでしょう。

カミグチが終わると福永さんがチヂン（鼓）を打ち、流れ唄が始まりました。チヂンの拍子はミボウチと呼ばれる基本的な三拍子で、歌詞は「今日の誇らしやや」で始まるシマウタの代表的な歌詞でした。囃子詞は「ハレーウミシヤラシユンナーヘ」と独特の台詞が入りました。唄い終わるとチヂンのテンポが速まり六調が始まります。一人ずつ立ち上がって六調を踊ると、最後にはお手伝い役の森忠夫区長も飛び入りで参加。オムケのフィナーレを迎えました。終了後は四人ともカミギンを脱いでテーブルを囲み、神事後の直会を楽しみました。

特集 今里集落オムケ・オホーリ

神を迎える



ごいながなしのす 御印加那之図 (南島雑話)

那留古国より、神毎年二月初の壬に渡来。これを御迎祭という。同四月の壬の七つめに帰り去る、これを御送祭という。大神祭、島の山神、海神を祭る。

(南島雑話から)



昭和53年オムケ (神道を通り浜へ降り神事を行う)

今年のオムケはナハドネで終了しました。以前行われていた浜での神事については「奄美大和村の年中行事 オムケ・オホーリ(瀬尾満・杉浦一雄)」から転記します。

『十一時終了。すぐに全員ホントネを出発。タカボンを持ったイガミ、ノロ、他のイガミたちと続く。太鼓を打ち鳴らし、各自ガヤ(ススキ)を左「右に打ち振りながら、「アナフェー、アナフェー」と列の前後が交互に唱えながら進む。「アナフェー」とは無病息災の島の名ということで、その名を唱えることによって災いを祓うことができ、また、そのような島になれと祈る気持も込められているという。』

十一時十分。浜に着。立神を正面にしてムントゴ河口の浜に横二列に座す。この場所は、立神とクビヤナ(クビリ山の尾根が南の方で最もくびれた所)とを結ぶ線上であるという。ノロの前にタカボンを置き、そのタカボンの前



ノロが祭り着る龍纏胸衣 (大金久・徳家所有)

に各自持ってきたガヤを束ねて浜に立てる。十一時十五分。浜での神事が始まる。ノロがタカボンに線香とろうそくをともし、神口を唱える。(略)次に、ミキのトリカワシをする。ミキと酒をノロから順にまわして飲む。これが終わると、神様のソデフリ(フトウ追イ)と呼ばれる踊りを行う。イガミたちが手をつないで輪になり、その輪の中に一人を外に出さないように手を振る所作をする。手をつなぐのは魚の網を、中の一人はフトウという魚(イルカともいう)を表わしているという。そして、太鼓を打ち、全員が立神に向かって六調を歌い踊る。十一時五十分終了。なお、ガヤは海に流し、全員いったん帰宅した後、公民館に再び集まり直会を行う。昔は浜で行っていたという。』



昭和53年オムケ終了後の今里公民館での直会

祈り

思い

引用・転写・参考文献

○「大和村誌」大和村誌編纂委員会(株式会社湖上印刷)

○「奄美大和村の年中行事」

○「復刻大奄美史」

○「南島雑話」名越左源太

○「國分直一・恵良宏・校注」(平凡社)

○「ノロ オムケ祝」

○「ノロ オムケ祝」

○「ノロ オムケ祝」

○「ノロ オムケ祝」

○「ノロ オムケ祝」



オムケを終え和やかに直会を楽しむ(左から川畑マス子さん・中元シズ子さん・安原フミさん・福永イクエさん)

浅識にも私は今里におけるノロ祭りはすでに消滅したのと思いいこんでお、オムケ当日も半信半疑で取材に向かいました。先に記したように、トネヤでの神事は以前のようにヒキ一族のイガミが集まり盛大に行うこともなく、浜での神事もオヤノロを始めとする神役の不在やイガミの健康上の理由から近年途絶えています。しかし、ウンニヤドネでたった一人神棚に向かい、静かにカミグチを唱える福永さんの姿は衝撃的で、あまりの神々しさにブンノケ(鳥肌)が立つのを感じながらカメラのシャッターを切りました。ノロの祈りは個人や家族のために行うのではなく「集落バ守テタボレ(集落をを守り下さい)」のカミグチのとおり集落の平和を願う無償の行為です。ともすれば自己中心的な行動になりがちな現代社会において、地域や先祖、自然に感謝を込め、無心に祈る彼女らの姿に心を打たれました。そして、ノロによって守られている今里集落にはきつとネリヤから神が訪れるに違いないと感じました。祈りにより人々の絆を深めるノロの世界観はシマの誇りでしょう。今や風前の灯火となりつつあるオムケ・オホーリですが、ノロたちの祈りがいつまでも続くことを願って止みません。

土を起こし、苗を植え、草をむしる。収穫の喜びを学び「いただきます」の声が弾む。

田んぼの授業 〜大棚小米作り〜

大棚小学校（霧島一浩校長・児童25人）は昨年、大棚集落の老人クラブと共に学校に隣接する水田で米作りに挑戦。3月の苗作りから、田植え、除草、稲刈り、脱穀、餅つき、しめ縄作りと、稲作に関わる全行程を児童たちの手で行いました。大和村ではかつて集落の背後に豊かな田袋が広がり稲作が盛んに行われていましたが、現在ではほとんど目にする事がなくなりました。大棚小の子供たちの手によって復活した稲作の様子をご紹介します。



3月16日 播種



4月15日 田植え



苗作り

稲作には「苗半作」という言葉があり、米の出来は苗の良し悪しで決まると言われています。大棚小では霧島校長先生を中心に苗作りから挑戦しました。初は塩水に浸し中身の詰まった重たい種だけを選別。専用の土を敷いた育苗箱に子供たちが丁寧に土を蒔き、ムシ口を被せて発芽を待ちました。

田植え

播種から1月後の4月15日。苗は高さ20センチほどに青々と成長していました。田植えを行ったのは学校に隣接する広さ3アールほどの水田。あらかじめ均された田んぼにお年寄りや児童全員が横一列に並んで1株ずつ手作業で苗を植えました。今年入学したばかりの奥平光くん、碓本愛美さん、賀川美紀さんの3人は初めての田植えでしたが、泥まみれになりながら上手に植えました。

稲刈り

夏休みの開けた9月1日、黄金色の稲穂に覆われた田んぼに子供たちが帰ってきました。この日も老人クラブのみなさんが「先生」となって収穫の仕方を指導。専用の稲刈り鎌を使って稲を刈り取っていきましました。子供たちはお年寄りの指導のもと器用に稲刈り鎌を使い次々と収穫。先にコツをつかんだ上級生たちが下級生の面倒を見る微笑みが見られました。



9月1日 稲刈り

笑ましい光景も見られました。収穫された米は中庭で乾燥させた後、昔ながらの足踏み式脱穀機で脱穀しました。

餅つき

11月には老人クラブのみなさんやPTAと共に収穫した餅米で餅つきをしました。杵を持つのは一苦労でしたが、老人クラブのみなさんに支えてもらい全員が餅をつきました。また、ついた餅は丸餅や、蒸したサツマイモと混ぜて練り込んだ「ヒツキヤゲ（シキヤゲ）」にして食べました。自分たちの手で収穫した餅はさぞかし美味しかったことでしょう。

しめ縄作り

11月、収穫した稲藁を利用して正月用のしめ縄を作りました。この日のしめ縄作りは児童だけでなく先生や保護者全員が初心者。完成品は心なしか不格好に見えましたが、かえって既製品にない温もりを感じました。

田んぼの授業

昨年5月、苗を植えてすぐ来襲した季節はずれの台風に気をもんだことでしょう。米作りは水の管理や雑草、害虫など収穫まで気が抜けません。子供たちは、お米を作る苦労を知り収穫の喜びを学びました。これからも感謝の心を忘れずに「いただきます」と手を合わせましょう。



11月2日 餅つき



11月31日 しめ縄作り



森林が育む豊かな自然

第55回奄美群島地区植樹祭

3月2日、本村の奄美フォレストポリスで第55回奄美群島地区植樹祭が開催され、林業関係者や行政機関などから約200人が参加しました。

開会に先立ち大和浜青壮年団による大和浜集落伝統の棒踊りを披露。勇壮な舞に参加者から大きな歓声と拍手がおこりました。

式典では、松田典久大島支庁長が「奄美大島の国立公園指定と世界自然遺産登録に向けて林業の活性化と自然保護の両立を図って行きたい」とのあいさつに続き、伊集院大和村長が「ようこそ奄美大島の高原、奄美フォレストポリスへお越し下さいました」と参加者を歓迎。引き続き「森林とのふれあいや体験活動を促進し森林を守り育てる活動の輪を広げよう」などのスローガンを採択しました。

式典終了後には同公園の水辺の広場周辺にヒカンザクラ150本、スモモ100本、大和村の村木であるモッコク17本を植樹。あいにくの雨模様でしたが参

加者達は丁寧に土を被せ木々の成長を祈りました。なお、式典における大和村関係表彰者は次のとおりです（敬称略）。

【林業従事者部門】

濱崎範磨（大和浜）

【豊かな森づくり部門】

名音集落（勝三千也区長）



奄美の森を駆け抜ける

第3回OSJ奄美ジャングルトレイル50k

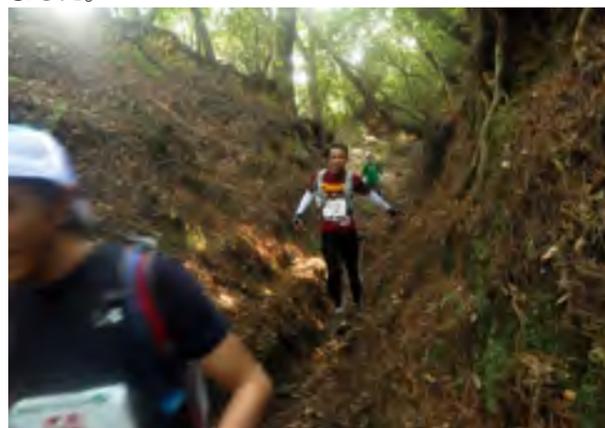
2月12日（日）、今年で3回目となるOSJ奄美ジャングルトレイル50K（主催：有限会社パワースポーツ）が開催されました。トレイルランニングとは道路の整備されていない山岳や森を走るスポーツで、時間を気にすることなく思い思いに自然と向きあって楽しめるのが醍醐味。

2010年10月に奄美を襲った豪雨災害により2011年は開催中止となり、約2年ぶりの開催となりましたが、今大会は宇検村総合運動公園を出発地点とする50キロコースに104名、大和村体育館前を出発地点とする20キロコースに52名の選手が出場しました。

本村を出発する20キロコースは思勝集落から砂利道の林道を登り、奄美大島の山々の脊梁を貫く奄美中央線（通称スーパー林道）で50キロコースと合流。途中に設けたエイドステーションではタンカンや黒砂糖など奄美の特産物が振る舞われました。

コース上には崖崩れなど災害の爪あとが残る中、イタジイの森やヒカゲヘゴの大木、満開のヒカンザクラ、さらには路上にアマミノクロウサギの糞も見られ、立ち止まって記念撮影をするランナーも。

選手達はダイナミックに変化するロケーションを楽しみながら、ゴール地点の奄美市名瀬小学校を目指しました。



桜並木をウォーキング

第10回まほろば大和ウォーキング大会

1月29日（日）、奄美フォレストポリスで第10回まほろば大和ウォーキング大会が開催されました。あいにくの雨模様にもかかわらず村内外から過去最多413名の皆さんがご参加くださいました。

ウォーキングはフォレストポリス管理棟を発着点として4km、6km、8kmの3つのコースで開催。午前10時、一斉に管理棟をスタートし、最長8kmのチャレンジコースはマテリアの滝付近を折り返しキャンプ場や水辺の広場を散策する道程で適度なアップダウンがあり適度な運動量でした。

見どころはヒカンザクラが咲く水辺の広場の桜並木。それぞれ足を止め、携帯やデジタルカメラで記念撮影を行っていました。また、広場近くでは給水所が設けられ、温かいお茶やクビギ茶（乾燥させたツルグミを煮出したお茶）、黒砂糖などをつまんでホッと一息いた後、ゴール目指して歩き始めていました。

なお、大会終了後は航空券をはじめとする豪華景品が当たるお楽しみ抽選会を開催。当選番号の発表の度に会場からは大きな歓声が上がっていました。

来年も多くの皆さんのウォーキング大会へのご参加をお待ちしています。



失われた自然を人の手で再生

第3回宮古崎つつじウォーク

3月11日、第3回宮古崎つつじウォーク（同実行委員会主催）が開催され、村内外から130人が参加しました。

同大会は国直公民館から宮古崎まで往復5キロの道のりを歩き、宮古崎でつつじの苗を植樹するという催しで今回が3回目の開催。

宮古崎は奄美市名瀬と大和村の間に位置し、その特異な景観から国定公園に指定されています。かつてはタイワンヤマツツジの名所として知られていましたが、昭和50年代の公園整備に伴い盗掘が相継ぎ現在ではほとんど見る事ができません。

そこで、「人の手で壊された自然は人の手で再生しよう」と、国直青壮年団を中心とするメンバーが宮古崎つつじの植樹を計画。10年前からつつじの苗作りに取り組みました。試行錯誤の後苗の育成に成功し、植樹とあわせて自然保護の啓発活動を行おうと始めたのが同ウォーク。

当日は風の強い天候でしたが、参加者は起伏の激しいコースを元気に歩き宮古崎を目指しました。宮古崎ではつつじの苗100本を植樹し、散水した後参加者全員で記念撮影を行いました。

いつの日か宮古崎がつつじの花で真っ赤に染まる日が来ることを願います。



室内でも楽しくプレー

大和体遊クラブ・タグラグビー教室

2月19日（日）、大和体遊クラブ主催によるタグラグビー教室が開催されました。

タグラグビーとはラグビーをもとにした年少者向けの競技で、タックルの代わりにタグと呼ばれる飾りひもを取り合いプレーします。相手の腰のタグを取ることで攻めてくる相手を止めたり、ボールを奪い返すというルール。ボールを直接奪い取ったり相手にタックルすることがないので小学生でも安全にプレーを楽しむことができます。

教室は平成23年度大島地区大会で優勝した大和ラグビーフットボールチームのメンバーを講師に招き、小学生から一般まで30名が参加しました。

初めはルールが分からず戸惑う初心者もいましたが、次第に慣れると相手ゴールを目指し自由にコート駆け回りました。

参加者からは「タグを取るのが面白かった」、「もう

1度やりたい」などの感想が聞かれました。

大和体遊クラブは総合型地域スポーツクラブの名称で、「老若男女問わず体いっぱい遊んでもらいたい」という願いを込めて名付けられ、平成24年度設立を目指して活動しています。様々な運動教室を開催しますのでぜひ一度参加してみたいはいかがでしょうか。



トップレベルの選手に学ぶ

大和体遊クラブ・バドミントン教室

2月25日（土）、大和村体育館にて大和体遊クラブがバドミントン教室を開催。村内外から40名のみなさんが参加しました。

講師はバドミントンジュニア監督・専修大学コーチの梶野尾昌一（とがおのしょういち）先生をはじめ、奄美市で合宿中の専修大学バドミントン部の監督や選手16名のみなさん。

参加者たちは競技レベル毎に6面のコートに分かれて実践形式の練習を実施。選手やコーチから実技指導を受けていました。

また、選手による模範試合が行われ、参加者たちは第一線でプレーする選手のラケットさばきや迫力あるスマッシュに感心した様子でした。

教室を通して梶野尾先生は素振りの大切さを強調。基礎動作や反復練習の大切さを説いていました。

今年度の大和村体遊クラブ主催のスポーツ教室は

今回が最後。クラブ事務局の河野通俊さんは「来年度以降も村民のニーズに応えられるスポーツイベントを企画・運営していきたい。」と語っていました。

みなさんも積極的に体遊クラブのイベントに参加し健康づくりに活用してみたいは？



発泡スチロールからポップコーン

大棚小学校・環境学習

1月13日（金）、大棚小学校（霧島一浩校長・児童26名）では（社）日本海難防止協会「宝の島プロジェクト・離島キャラバン隊」（NPO法人ユアアイ 自立支援の会共催）による出前授業を行いました。

同プロジェクトは海岸に漂着した発泡スチロール等を原料に、大型トラックに積まれた油化装置で燃料化するイベント型実験。これまで日本各地の離島でデモンストレーションを行い油化システムの紹介を行ってきました。

実験では、あらかじめ児童たちが近くの海岸で集めた発泡スチロールの漂着ゴミを装置に投入すると、細かく粉碎された後に溶かされ、排出ノズルから燃料（スチレン油）を抽出。発泡スチロール1キロ当たり約1リットルの燃料が生成されるとのこと。

発泡スチロールをはじめ石油製品が大半を占める漂着ゴミは海岸線の景観を損ねるばかりか生態系にも悪影響を及ぼしています。回収した漂着ゴミを油化装置

によって燃料に変えることは画期的な取り組みです。

授業では、生成した燃料をもとに電気をおこしポップコーンや綿菓子を作りました。

児童たちは漂着ゴミがエネルギーになる過程を目の当たりにし、環境汚染やゴミ処理、エネルギー資源について身近な問題として学びました。



シビの三枚おろしに挑戦

大和小学校・調理実習

2月29日（水）、大村立大和小学校（農原弘久校長・児童46名）では総合学習の時間を利用して、5、6年生の児童15人が魚のさばき方を学びました。

この日の「先生」は、まほろば漁業集落のメンバーの森山英治さん（74歳）重信忠純さん（73歳）宮田益慶さん（64歳）山崎忍さん（60歳）の4名の漁師の方々。「教材」となったのは重さ1.2キロほどのシビ（キハダマグロの若魚）12匹でした。

今回の教室は、普段食べている地元の食材に親しみ、食べ物を大切に扱うことが目的。

児童たちは生ぐさい臭いに抵抗なく魚を手に取り、先生方の指導のもと丁寧に魚をさばいていきました。

最初はおっかなびっくりだった包丁さばきも次第に慣れ、中には三枚おろしから刺身の盛りつけまで手際よくこなす児童も。

6年生の福山勇生くん（国直）は「いつも婆ちゃん

からはお家でもお母さんの手伝いをして魚を食べたい」と語っていました。

扱ったシビの刺身はお昼の給食に出されたとのこと。自分でさばいた刺身はどんなに美味しかったことでしょうか。これからも島で獲れる魚を美味しく大事に食べてください。



タラソ半額助成利用者を募集

タラソテラピーを継続利用することによって、体の調子がよくなり元気でいきいきと生活している方々が大和村でも増えていきます。このため大和村では、平成24年度もタラソ半額助成を行い、皆様の健康づくり・介護予防を応援していきます。この機会にぜひお申し込み下さい。

■対象者 大和村在住の40歳以上の方（先着40名様）

■利用期間 平成24年5月から平成25年3月

■利用頻度 利用期間中、週1回以上継続する意思のある方

■交通手段 自家用車またはタラソ専用バス（バスは週1回運行・無料）

■利用施設 タラソ奄美の竜宮

■助成金額 いつでも会員（1カ月あたり二千五百円・何回でも利用可）チャレンジ会員（1ヶ月あたり千五百円・月4回まで利用可）

■申し込み締切 平成24年4月23日（月）大和村地域包括支援センター
早川・重野（電話0997-57-2218）



九州電力からのお知らせ

- 鯉のぼりは電線にふれないところ。鯉のぼりは電線から十分に離れた広いところで掲げましょう。
- もし、鯉のぼりが電線にかかった場合は、危険ですから自分で取らずに、すぐ、最寄の九州電力営業所までご連絡ください。
- クレーン作業等を行なう前に
- クレーン作業等を行う前には、付近の状況をよく観察して電線路に接触する恐れがないか確認する。
- 配電線の近くで作業を行う場合は、九州電力に連絡して建設用防護管を取付けて安全措置が講じられた後に作業を行う。
- 電線路近くでの作業では、専任の監視者を設け単独作業を行わない。
- 車両の移動を行う場合は、必ずプールの収納、ダンプカー等については荷台の下げを確認して移動する。
- 最寄の九州電力営業所までご連絡ください。

問い合わせ先
九州電力(株)奄美営業所
Tel. 0120-986-808



島の宝 満1歳おめでとう

森 更紗さん
保護者・森 亮さん（思勝）



週末が待ち遠しい亮パパです。

上間 煌介さん
保護者・上間 蔵生さん（思勝）



涼介兄ちゃんと激しく遊んで生傷がたえないこうすけくんです。

役場の勤務時間が変更されます

大和村で、鹿児島県や他市町村等の均衡を踏まえ平成24年4月から村職員の勤務時間を1日あたり8時間から7時間45分に、開始時間の8時15分を8時30分に変更します。

区分	現行	変更後
勤務時間	8時間	7時間45分
始業時刻	8時15分	8時30分
終業時刻	17時15分	現行と同じ
休憩時間	12時～13時	現行と同じ

大和村では今後とも公務運営の一層の効率化を図るとともに行政サービスの向上に努めてまいりますので、村民の皆様の御理解をお願いいたします。



お便りをお待ちしています

鹿児島県知事公室広報課主催による鹿児島県広報コンクール・広報誌部門において、本村の「広報やまと」11月号が昨年に引き続き二度目の入選の栄を賜りました。

身に余る栄誉を村民のみなさまにご報告するとともに、日ごろからの広報活動へのご協力で感謝申し上げます。広報やまとは、村民一人一人にスポットを当て「顔の見える広報誌」づくりを目指すとともに、行政からの一方的な告知に留まらず双方方向に情報が行き交う紙面作りを努めます。

村政への要望や広報誌への意見、今後特集してほしい記事など皆様のお便りをお待ちしています。紙面にてご紹介いたしますので、住所・氏名をご記入のうえ紙面末尾に記載しました住所（アドレス）まで郵送またはメール、ファックスにてお送りください。

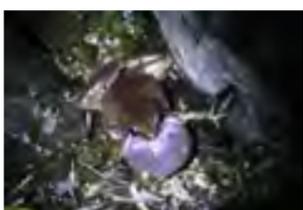


いきもん マンデー vol.06

夜の寒さも和らいだ今日この頃、懐中電灯を片手に集落周辺を歩くと、生きもののさまざまな声が聞こえてきます。

今回は雨が降ると、待つてましたと言わんばかりに鳴き出す「カエル」を紹介いたします。時に耳鳴りを覚える程の大合唱。声はよく聞くものの姿をじっくり見たことがある方は少ないのではないのでしょうか。ただ単に「カエルの鳴き声」として聞くより、鳴き声の違いに耳を傾けてみると、新たな出会いや発見があるかもしれません。

ヒメアマガエル



日本で一番小さいカエル。体長は2〜3cm程です。鳴いている姿は、お腹がポッコリと出た小さなお相撲さんのようで愛らしい。「ガアア・ガアア」とその姿から想像できないほどダイナミックな声で鳴きます。

リュウキュウカジカガエル



体長3cmほどで「リイリイリイ」と涼しげな鳴き声です。体の色が黄土色、赤褐色、灰色と個体よってさまざまで、中には白に近い個体もいました。繁殖期になると、踏みつぶさないよう歩くのに難儀するほどたくさん集まります。

ヌマガエル

体長3〜5cmほどで、畑や田んぼの周辺でよく見かけます。奄美には9種のカエルが生息していますが、本州との唯一の共通種です。「キヤウ、キヤウ」と可愛らしい声で鳴きます。



ハロウエルアマガエル



体長3〜4cm程で、鳴き声は「ギーギーギー」とよく響く。木の枝など、高い場所でも鳴いていることが多く、見つけるのが難しいですが、雨が近づくと真っ先に鳴き出します。

— 大和村自然保護推進員 勝間田さとみ —

お誕生おめでとう

- 直島彩音(加さん) (保護者・直島秀治)
- 永田 愛奈(あいな) (保護者・永田義正)
- 重村 琉音(るおん) (保護者・重村大剛)
- 南雲 朝(あさ) (保護者・南雲聡)

お悔やみ申し上げます

- 南 幸伊智(ゆき) (76歳)
- 前田源一郎(げんいちろう) (64歳)
- 玉井 洋子(ひろこ) (71歳)
- 木村 和代(わしろ) (75歳)
- 眞井 千ヨ(ちよ) (100歳)
- 藤田 キク(きく) (99歳)
- 中原 鐵雄(てつお) (94歳)
- 満井 優子(ゆうこ) (76歳)

香典返し (社会福祉協議会へ)

- 前田まさ子(前田源一郎様)
- 木村 弘重(故木村和代様)
- 玉井 俊一(故玉井洋子様)
- 藤田 龍一(故藤田キク様)

広報誌謝礼ありがとうございます

- 牧田 朋子(東京都町田市)
- 元 善二(東京都練馬区)
- 森山 茂知(大和村国直)
- 永野 章(神奈川県横浜市)
- 今田 実夫(兵庫県尼崎市)
- 前里 静(奄美市名瀬)



今里立神 (村民体育大会)

大和村の人々の暮らしや風景を写した懐かしい写真を掲載する「ナツカシヤふおとぐらふ」。第2回目のふおとぐらふ(写真)は昭和58年の今里立神。

昭和58年10月9日に行われた第21回村民体育大会時に撮影された画像です。西部グラウンドにはテントが立ち並び、県道には何台もの車が並んで駐車しています。

当時の「広報やまと」を開くと、「秋晴れのもと西部グラウンドにおいて子どもからお年寄りまで1700余人が参加して盛大に開催されました。〜今回から大和校区がA Bの2チームが出場することになり合わせて6チームが優勝を目指して熱戦が繰り広げられました。」と写真を添えて掲載されています(ちなみに成績結果は優勝大和B、2位大棚、3位大和A)。

大和小中学校グラウンドと交互に村民体育大会を開催した西部グラウンドですが、現在は用途廃止がなされ人々が集うことはありません。

ナツカシヤ
ふおとぐらふ
第2回



撮影：梶谷正直

こせきの窓

人口	1,701人	(△63)
男	822人	(△12)
女	879人	(△51)
世帯	894戸	(△6)

3月1日現在
(前年同月比)

洋上にたたずむ今里立神は存在感があり見る者を魅了して止みません。今里集落民にとってシマの誇りでしょう。その圧倒的な存在感から村の広報用素材として度々使用してきました。広報誌、パンフレット、カレンダー、インターネット。画像を掲載するたびに必ずある反応が寄せられました。それは今里漁港整備に伴い海岸が埋め立てられ、集落前に設置されたテトラポットが立神の景観を損ねているというもの。村は住民の要望を受け、漁業基盤の整備と防災的観点から漁港整備をしましたが、立神に思いを抱く方々、特に集落を離れて暮らす出身者にとって景観の変化は耐え難いものがあるようです。

ノロ祭祀を始め風習や風景は少しずつ変わること余儀なくされてきました。しかし、形を変えながらも、人々のために祈り続ける女性達がいまもいます。立神は変わることなく今もなお今里の人々を見守り続けています。



←バーコード読み取り機能付き携帯電話をご利用の方はここから大和村ホームページ携帯サイトへ簡単にアクセスできます。それ以外の方は直接 URL を入力してアクセスしてください。
(<http://www.vill.yamato.lg.jp/i/>)

発行・編集 大和村役場総務企画課
〒894-3192 鹿児島県大島郡大和村大和浜 100 番地
TEL 0997-57-2111 FAX 0997-57-2161
mail:info@vill.yamato.lg.jp
<http://www.vill.yamato.lg.jp>